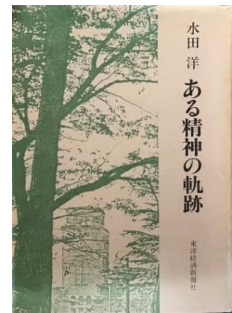


水田洋先生を偲ぶ

水田洋先生が3日に亡くなられたことを、宮本憲一先生からのメールで知った。先生から学ぶことが多かったので残念でならない。水田先生はアダム・スミス研究の世界的な第一人者であり、社会思想史研究などの分野で日本の学界をリードされてきた。

写真下は1978年に東洋経済新報社から出版された『ある精神の軌跡』。水田先生の自伝であり、青山南町6丁目、小平の森、国立の野、戦雲のかげに、職業としての学問から構成されている。名古屋大学近くの古書店で手に入れたと思う。先生の訃報を知り、久しぶりに手にとった。本文の最後を抜粋して紹介しよう。

1977年の夏に香川大学で講義をしていたとき、ぼくの「学問的多産性の秘訣はなんですか」ときかれたことがある。そのときは返答に窮して、帰宅してその話をしたら、女房は言下に「寝ることだわ」とこたえた。極端な低血圧のせいもあって、僕の睡眠時間はたしかに長い。しかし、だれでも、1日24時間のうち、頭脳がすっきりしているのは、それほどながくないのだから、そういう状態を確保するために、十分な休息はつねに必要である。ところが、こうして「ひまさえあれば寝る」ことになると、そのかわりになにかを切りすてなければならない。きわめて平凡な結論だが、つぎのようなことになるだろう。すなわち、すべてを犠牲にしてしゃにむに勉強したからといって、たいした成果が得られるわけではなく、長期戦の身構えが必要なのだが、しょせんは1日24時間で数十年の枠のなかのエネルギーの使用方法の問題なのだから、なにかを切りすてなければならないと、ということである。この奇妙な自伝も、切りすてるべきであったのかもしれない。



私も「古希」になってからは、とりわけ睡眠時間を多くとり、「体をこきつかわず」を心がけている。なんとかコロナにも感染せず、毎日のように地下鉄で図書館に通いつけている。水田先生の自伝から多くのことを学んできたが、「研究者」としての長期戦、長寿の秘訣も参考にさせてもらっている。

先生の自伝が出版された翌年、1979年に名古屋市立女子短大に就職できた。水田先生たちと名古屋五輪誘致「騒動」に関わることになった。水田先生の学問的業績だけではなく、平和運動や住民運動などでも、先生から学ぶことが多かった。3枚目の写真は先生が代表をつとめた愛知環境と開発のフォーラム。



先生のご自宅から、京都までご一緒したことが忘れられない。

水田洋先生、ありがとうございました。

(2023年2月10日)